

令和5年度 第2回 織田廣喜美術館運営協議会 会議録

1. 会議の名称 令和5年度 第2回 織田廣喜美術館運営協議会
2. 開催日時 令和5年11月15日(水) 10:30～
3. 開催場所 織田廣喜美術館 市民アトリエ
4. 公開非公開の別 公開
5. 出席者 ※敬称略

(1) 出席委員

緒方 泉 (会長)
坂本 留里子 (副会長)
坂田 続穂
丸山 桃子
栗野 麻里

(2) 欠席委員

三木 一司

(3) 教育委員会

生涯学習課長 (館長) 末永 康洋
課長補佐 上野 智裕
図書・美術館係主査 藤原 千晶
図書・美術館係主査 有江 俊哉

(4) 指定管理者 (株)図書館流通センター

統括責任者 下田 富美子
サブチーフ 木村 亜沙子

6. 傍聴人数 0人

7. 議題及び審議の内容

【議題】

- (1) 第6次教育アクションプラン事業シートについて
- (2) 令和5年度事業報告について
- (3) 令和6年度事業計画について
- (4) その他

【提出資料】

- (1) 第6次教育アクションプラン（抜粋）
- (2) 令和5年度経過報告
- (3) 令和6年度事業計画
- (4) 年間入館者推移
- (5) 図書館・美術館メールエクスプレス事業

【議題及び審議の内容】

- (1) 第6次教育アクションプラン事業シートについて
事務局による説明。それに対する質疑応答。

《主な質問・意見等》

委員 事前に資料を受け取り、内容を確認しました。全体の方向性は評価できません。

会長 市民へ向けたメッセージと、これからの子どもたちへ向けたメッセージの二段構えがよい。

委員 子どもたちへ向けた具体的なプランが記載おり、教育普及事業の効果の項目に「ふるさとに関心と誇りを持てる豊かな心を育てます」という文章から子どもたちが美術館をもっと身近に感じ、大人になった未来でもまた織田廣喜美術館に集うイメージが見えた。

委員 児童、生徒へ配布されているタブレットへのデジタル情報の配信はとてもいい取り組みである。美術館で何が行われているかを知ることによって美術館に興味を持ってもらえる機会となる。

会長 アクションプランは一定の方向性を示し、3年間の運営方針を述べている。ただ、政策や事業はアクションプランに基づいて行われるため、その説明が必要である。アクションプランが承認されると、具体的な予算化された事業や政策が進むことになるが、方向性の明確な説明が求められる。特に、市民向けや学校向けにどのような方向性を目指すのかを明示する必要がある。アクションプラン中の文化芸術活動推進事業について、「学習指導要領では地域の美術館の利用や連携を図ることが推奨されている」とあり、ふるさとや郷土といった言葉が続いているが、学校関係者の委員として、これにどのように思われるか？

委員 同事業の内容に「郷土に縁のある作家の作品を活用した教育プログラム

等を開発し、学習支援を行います」とあるが、どのくらいの作家がいるのかなど把握できていない。タブレットなどで調べるといろいろな方が出てくるが、例えば書道の方がボランティアとして実際に学校へ来ていただいて、条幅（書道用の神の一種。全紙の半分の大きさ）に大きな筆で文字を書くだけで、子どもたちは本物に触れることが新鮮な経験である。先日、地元の保護者で、学校でヴァイオリンを演奏していただいたが、実際の演奏や、シルクのドレスの装いを見て目を輝かせていた。であるから例えば、実際に油絵を描かれるところを見て、描いた作家の絵が美術館に飾られている作品を鑑賞できたりなど、身近にそういう作家がいて、普段は触れられないものに触れさせてもらったりする体験があるといいが、アクションプランに記載されている教育プログラム等を開発はどのようなことが行われるのか。

会長交流や積極的なアウトリーチという文言が盛り込まれると、よりイメージをしやすい。交流の場を設けるなど、市民や子どもたちとの地域に縁のある作家たちとの交流、さらには絵画や県展で飾られる様々な部門の作品、ドレスなど工芸としての作品も含めて、それらの地域に縁のある作家との交流を進める場にしていきたいという言葉が加わると、市民との関わりや、委員が述べた学校との関わりがもっと広がっていく可能性がある。交流という言葉がなければ、美術館が地域へ出向くことへの説明がつきにくい。また、郷土の作家を発掘してそれをつなげていくということ。必ずしも外部から人を招聘するだけでなく、保護者の中や、地元には素晴らしい才能を持った方がおられるので、そういった方々を発掘していくことも美術館の使命でもある。

事務局今年は市内からの県展に入賞、入選者が多かった。子どもたちが県展に飾られている身近な方々の作品を観ることによって、自分たちも頑張ればいつか県展に飾られるという励みになる。

会長例えば、郷土に縁のある作家の人材バンクを作成する。そうすることで、そこから様々な方とのご縁が生まれる。そのご縁によって子どもたちや市民との交流や、美術館の教育プログラムも結びついてくる。地元には優れた人材が存在するにもかかわらず、その潜在的な力を十分に活用できていない箇所がある。予算をかけて遠方から専門家を招聘することは容易だが、アクションプランの中で「持続可能」という言葉が用いられている以上、制約のある予算内での継続は難しい課題である。したがって、高額な予算を投じて遠方の専門家を呼び寄せるよりも、地元には潜む優れた才能を発掘し、人材バン

クとして蓄積していく方が望ましいだろう。こうしたアプローチにより、より持続可能で多様な地域社会との結びつきが生まれ、美術館は地域の方々が主役となるステージとして活躍することが期待される。

事務局 嘉麻市の文化協会が支部制から部門制へと活動の形態を変え、専門性の高い活動となっている。県展の入賞、入選者も文化協会会員の中から出ている。そういう意味では、文化協会が補完として人材バンクを担っていただくことが期待される。そして、美術館とコラボレーションして新しい事業を展開していければ、地域に主体的な動きが出てきて、美術館が地域の宝となり、もっと利用者も増え、話題性も高まるだろう。

会長 アクションプランの事業効果に「様々な団体との連携協力」と記されているが、様々な団体の中には文化協会が含まれており、その文化協会が部門別の活動となったことから、各部門の中から人材を紹介していただけるような人材名簿が作成されると、学校も書道や工芸作家が地元でいらっしゃる場合、来ていただけるかもしれない。他の事例としては、公民館活動の中で地域の商店街の方も魚屋さんが学校で魚のさばき方を指導したケースがある。食育として地元の方々が関わることで、今度は日常的な地域の見守りへとつながっていく可能性がある。地元の方々の活用こそが今後の持続可能な活動だと思う。今回、多くの良い言葉が盛り込まれているので、この言葉を活用しながら各方面に説明していただけると良いだろう。

事務局 今回のアクションプラン策定にあたり、指定管理者と協議し、アイデアをいただきながら作り上げた。

(2) 令和5年度事業報告について

指定管理者による説明。それに対する質疑応答。

《主な質問・意見等》

委員 秋までに多くの事業が行われ、多くの来場者があったことが分かった。また学校関係の交流が増えたということも評価できる。それらの活動は美術館の外からはそれらの活動が見えにくいので、もう少し美術館の活動がより外部へ可視化できると、いい取り組みが多いので、市民も興味がわく。

会長 SNS等で情報発信は行っているのか？

指定管理者 イベントの募集告知に留まっている。

会長 事業の内容レポートについては肖像権の問題などが発生する可能性が

あるが、了解していただけるのであれば、子どもたちの笑顔や生きる力、前へ向かっていく力が美術館で養われているということを表す場として、美術館はホームページやSNSなどを通じて発信していくことで、「つながる」ことが市民に知られることになる。顔は映らない後ろ姿や手元などのアングルで、何をやっているかを見せて伝えるといい。例えば、幼稚園のフィンガーペイントでも手元を見ただけで楽しそうな様子が伝わるし、小学校低学年でも楽しめる内容である。現在、「起立性調節障害」などにより朝起床が難しく、学校に行きにくくなるという症状が不登校の要因にも挙げられているが、アートは心を活性化させる要因を持っている。フィンガーペイントはまさに活性化させる手段の一つである。子どもたちが元気よく指先で表現する様子を画像として使用し、出前授業などでそうした授業が提供できることを発信すると、学校との連携のきっかけとなる。

委員 我が家では子どもから美術館の出前授業でけん玉を作ったとか、今度は虫の展覧会があるということを知り、良い事業が行われていると知った。田川清美の写真展も良い展示だったが、会場に入場者はなく残念だったので、新聞社など取材してくれる報道機関が増えたらいいと報告書を読んで感じた。

委員 3年生の生活科には、体の仕組みを学ぶ単元がある。この単元の実施と、栗林慧さんの昆虫写真展が重なり、児童たちは展示を見学したり、美術館横の公園で昆虫採集を行った。ただし、当初、担任はこの展覧会が開催されていることを知らず、会期が始まって美術館正面に飾られていた大きな写真を見て初めて気づいたそうである。他の学校も展覧会の開催を知っていたら、美術館に来館し、実際の作品を観たり触れたりできたのではないだろうか。また、愛宕幼稚園への出前授業の報告があったが、学校でも工作に向けて、一人の担任が計画から準備、指導までを行っている。愛宕幼稚園のように美術館から専門の職員が来て教えてくれたら、担任の業務負担も軽減できると考えた。

委員 取材がケーブルステーションだけというのは残念である。新聞などのメディアで報道されたら、もっと入場者が増えたかもしれない。子ども向けの出前授業は評価できるが、大変だろうと理解するが、愛宕幼稚園ばかりでなく市内の施設へも行ってほしいと思う。

会長 出向くこと以外に、学校の先生にアトリエに参集していただき、フィンガーペイントなどの指導の教員のための美術館教育プログラム研修会があ

ると、先生たちも新しい教材開発を知り、負担が少ない授業などにつながるかもしれない。織田廣喜美術館の見学は多岐にわたり、小さな子どもから放課後デイサービスなどが来館している。英国では博物館の開館時間前からベビーカーを押しながら並んでいた。英国の博物館では、入口を入ったところにベビーカー置き場、大きな荷物を預けられるロッカーや貴重品以外の大きな荷物を掛けられる場所、授乳室が設置されていて、小さなお子さんを連れて行きやすい環境が整えられている。博物館が小さな子どものころから訪れ、社会性の醸成する場所となっていたそうです。そういう意味では、織田廣喜美術館にも小さな子どもたちが訪れることで社会性を身に着けるという活動が今後も展開されていくだろう。私の来年度の科学研究費のテーマは、不登校や引きこもりの子どもたちの活性化について美術館、博物館をどのようにして活用していくかというもので、学校とのつながりを戻していけるかが焦点である。米国、英国への調査で明らかになったのは、博物館にはミュージアムスクールが存在し、学校へ行けていない子どもたちがそこへ行っていた。学校には適応指導教室や保健室があるが、そこへも行きにくい子どもたちもいる。ミュージアムスクールでは、そのような子どもたちが博物館へ来て過ごし、特別なカリキュラムを設けず、好きな絵を観たり、粘土などで工作してみたりして子どもたちにエネルギーを蓄えさせ、活性化させるという利用法がある。博物館での活動は学校へ報告や共有され、子どもたちはもっと学びたい、知識を得たいという気持ちになって学校へ復帰していく流れができていた。織田廣喜美術館での適応指導教室の受け入れは素晴らしい活動であり、継続していただきたいと思う。

事務局 米国、英国にも不登校は多いのか？

会長 国内の不登校児童生徒数は、文科省の統計で約 29 万 9 千件、英国は 13 万人くらい、フランスでも数万人とされている。フランスなどでは「HIKIKOMORI」という言葉が定着しているようです。これは非常に深刻な社会問題となっており、日本の社会における子どもたちの状況に世界が注目している。社会的な課題に対して博物館がどのように関与できるかを検討しているが、英国では中学一年生のギャップに対して博物館が積極的に関与している。例えば、ギャップを感じている子どもたちを美術館に招き、絵を観ながら自分の中で湧き上がってきた感情をメモさせ、自分の中でたまっているものを吐き出させる場として機能をしている。吐き出せなくて苦しんでいる

子どもたちに表現できる場を提供することが重要である。

(3) 令和6年度事業計画について

指定管理者による説明。それに対する質疑応答。

《主な質問・意見等》

事務局広報に関して、先ほど委員からのご意見があったので、補足すると、指定管理者制度の導入により、事業の内容はより充実しており、広報も各新聞社などへのニュースリリースを行っている。しかし、報道機関の関心を引かないのか、なかなか取材を受けられていない。そのため、令和6年度においては、もっと工夫を凝らし、地元の道の駅や碓井義務教育学校などとの連携を強化し、話題性を高めなければ報道に注目されないかもしれない。ホームページや SNS などでの情報発信も有効だが、夕方のテレビなどで報道されると効果が大きいことも考慮して、来年度はその部分を特に強化していきたいと考えている。

委員事業の内容はいいし、充実しているがその分スタッフは大変だろうと思う。健康面など心配にもなるくらい事業が充実している。

会長スタッフも自分たちの健康管理を大切にする必要である。スタッフが笑顔でなければ、市民へのサービスに繋がらない。事業の計画に当たっては、事業同士の紐付が重要である。展覧会が美術館活動の中核をなすため、企画展の内容に基づいてアートキッズや夏休みの普及事業、学校との連携などを検討することで、職員の業務負担が軽減され、市民にも分かりやすく告知でき、展覧会に参加できるし、普及事業への参加も促進される。展覧会と関連するプログラムが整備されると、学校においても展覧会に関する情報を得ると同時に、夏休みの自由研究にも関連づけやすくなり、授業計画に組み込みやすくなる。そのためには、事業スケジュールに関する情報提供を事前に行い、先生たちが検討しやすい環境を整えることが重要である。

事務局本年度より、市内の小学校、中学校、及び義務教育学校へ美術館の情報を「メールエクспレス」を通じて配信しており、学校への情報提供がスムーズに行われるようになりました。この取り組みを来年度も継続し、先生たちにおける手間と時間をかけないように情報提供を行っていきます。

会長報道機関だけでなく、学校においても情報に含まれる内容にインセンティブがないと反応しかねるため、キャッチコピーなどを巧みに使い、先生た

ちに響く情報提供を行う必要がある。「メールエクスプレス」という良い仕組みができたので、魅力的な内容として伝えられるような言葉をどう選ぶかも重要である。美術館の側もコピーライティングのスキルを身につける研修会も必要である。また、子どもたちに美術館の利活用を促す際には、モデルとして撮影協力を依頼して、実際に子どもたちが美術館や公園を利用している様子を示す画像を使用するなどの工夫が有効である。美術館敷地内の植栽については、園芸が好きなど、様々なスキルを持った市民の方々に呼びかけてボランティアとして美術館の園芸活動に参加していただくことも一つの方法である。福岡市博物館では月曜日の休館日に市民ボランティアが博物館前の植栽の手入れを行っている。花の苗などの費用は福岡市が負担しているが、花を植え、手入れなどの作業は市民の方々がボランティアとして率先して協力している。

委員嘉麻市には「花いっぱい運動」という取組みがあり、その活動を進めている団体も存在する。美術館正面の階段周辺はまだ何も植えられていない状態なので、その活動に参加されている団体をお願いして、花を植えていただけると良いと思う。

事務局以前は花壇の手入れをしていただけるボランティア団体があったが、会員の高齢化により解散された。

委員市内には他にも花壇の手入れをされている団体がある。

会長ボランティア説明会の際に、「植栽」などの新しい部門を追加して募集すると良いだろう。来年度は指定管理者にとって3年目であり、様々な新しい事業への取り組みが見えるが、事業の紐づけが重要である。新しい取り組みも大切だが、博物館の中心的な事業は展覧会であるので、展覧会を中心に据え、それに伴って様々なプログラムを実施しつつ、市民の理解を得られる博物館活動へとつなげていくことが重要である。ただし、これは限られた人材で行わなければならない、新たな事業を増やすとスタッフの能力を超えてしまう可能性がある。

指定管理者図書館事業の延長線ともなる事業もあるので、図書館のスタッフとも連携し、一人のスタッフの負担にならないように配慮しながら運営している。図書館には学芸員資格を有しているスタッフも在籍しており、さらには学芸員を対象とした研修も実施している。スタッフが無理なく作業できるように、業務を分担しながら取り組んでいる。

事務局美術館の運営において、市民も巻き込んでいくことで同じ認識で取り組めると、スタッフの負担も軽減でき、市民にも主体性が生まれると考えている。

会長持続可能性を考慮する際には、現在の指定管理者が運営している期間だけでなく、次の指定管理者が引き継いだ時でも、市民が主体的に関わる要素を継続できるようにすることが美術館の生存につながる。市民が関与しつづけられなくなると、その後の継続が困難になる可能性がある。したがって、ゆっくりとでも確実に美術館の運営に取り組むことが望まれる。また、スタッフが楽しむことも重要である。企業においては健康経営が求められており、これを充実させられない企業は将来的な存続が難しい。市民が楽しみながら健康的な生活を送るために美術館を利用する人々が増えることを期待する。子どもたちを通じてその数を増やすためには、楽しい事業が提供されていることが大切だ。

委員美術館が街にあることは筑豊地域では少ない。美術館の存在を広く知ってもらうために、メディアに取り上げてもらう際には、偶然ではなく保育園などへ協力を要請し、子どもたちが美術館を利用している様子を報道してもらうと良いだろう。また、道の駅うすいではテレビの取材がよくあるので、そのような場で美術館まで取材を巻き込み、放送されることで美術館の知名度も上がると考える。

委員新聞社の取材が少ない原因は、報道資料の提示方法にあると思う。面白い事業を展開しているので、SNSなどで頻繁に情報を発信すると報道記者にもアピールしやすくなるだろう。私自身も織田廣喜美術館が好きで、もっと市民の方々に美術館を訪れていただき、愛される存在になってほしいと思っている。

委員来年度の事業の中で、学校での活用を促進し、校長会などでも周知していただきたい。また、美術館の開館時間は決まっているが、それ以外の時間帯での利用は可能か？

事務局場合によっては変更できる。

委員嘉麻市のPTA会長の会合が年に5、6回開催されているが、仕事の都合などで夜に開催されている。子どもたちに直接関わり、役員や会員への影響力のあるPTA会長が美術館の事業を直接知るために、美術館で会議を開催することは可能だろうか？

事務局 会議だけの時間外での利用は難しい。

会長 九州歴史資料館がナイトミュージアムという取り組みを行っているが、美術館も夜に開館する事業があれば、会議をそれに合わせて設定し、ナイトミュージアムで展示室を見学することも検討できる。また、九州歴史資料館では前の広場でマルシェを開催し、キッチンカーも来て賑わっているが、織田廣喜美術館でも同様の事業を行うことで、道の駅うすいととの連携もできる。年に一度だけでも開催すれば、夜しか美術館に来られない人たちにもアプローチできるだろう。

総括として、今年度も充実した事業を行っていただいていることに感謝する。来年度についてもアクションプランに基づき、第5次アクションプランから第6次アクションプランへとつながる事業計画を進めていただければ幸いである。

(4) その他

事務局より嘉麻市人権の集いの告知、及び展示室5にて嘉麻市総合文化祭告知を行った。

閉会

この会議録は、緒方会長に確認していただきました。